

---

## サンパウロ大学 交換留学 月例報告書（12月）

国際文化学科3年

---

### はじめに

12月の初旬、ついに USP でのすべての授業が終わりました。短い期間でしたが、USP で過ごす毎日はとても充実していて、多くの学びを得られました。中旬からは卒業論文の執筆に向けて文献調査や史料館の訪問などを行い、年末にはパラナ州で暮らす親戚に会いに行きました。今月の出来事と留学期間全体の振り返りをご報告します。



USP の友達と食堂でお昼ごはん

### 卒業論文の執筆に向けた調査

USP の授業が終了し、サンパウロで卒論のための調査を本格的に始めました。私は留学中、SUAC のゼミには参加せず、必要に応じてゼミの先生にオンラインやメールで相談させていただいている。当初、「ブラジルの日系社会における日本語教育」を卒論のテーマにしようと考えていましたが、これまでの経験をふまえ、少しだけテーマを変更しました。現在は、サンパウロにある「ブラジル日本移民史料館（文教図書館）」や「社団法人ブラジル日本語センター」、「国際交流基金サンパウロ日本文化センター」などを訪問し、文献を調べたり、センターの方にお話を伺ったりしています。ブラジルには2月まで滞在する予定なので、残りの約2カ月間、調査に全力で取り組みたいと思います。

### ついにブラジルの親戚のもとへ

8月の報告書に「留学を決めた理由」の一つとして、ご先祖様がブラジルに移住していたことが大学1年生の時に分かり、奇跡的にブラジルで暮らす親戚と連絡がとれたことを書きました。そしてこの度、念願叶い、会いに行くことができました。親戚の暮らすパラナ州は、サンパウロ州の南に隣接しており、長距離バスで約6時間の距離です。今回は、Santa Cecília do Pavão と Curitiba という町にある親戚の家に数日間ずつお世話になり、年末年始を過ごしました。「来てくれて本当にありがとうね」と歓迎してもらえて、とても嬉しかったです。

### 繋がった家系図と感動の連続

97年前にブラジルに移住したご先祖様と現在ブラジルで暮らす親戚について、私が持っていた手掛かりは、「私の高祖母が『ブラジルに行った弟が心配だ』と言っていた、という祖父の姉の記憶」と“48年前に私の曾祖父のもとに届いたブラジルからの手紙”でした。その手紙の封筒や便箋、一緒に入っていた写真のコピーをブラジルの親戚に渡すと、「これはじいちゃんの字だ」「ああ懐かしい写真だ」と口々に話し、涙を流して喜んでくれました。そして、日本の家族とブラジルの家族の記憶とアルバムを総動員させ、家系図が繋がりました。さらに、私の祖父の兄が「たしか、おじいさん（私の曾祖父）はブラジルの親戚が来日した時に会ったことがあるはずだ」と言っていたのですが、その時の写真がブラジルの親戚の家にあり、記憶の証明になりました。

私と同世代のブラジルの親戚との目線で説明すると、“私のひいひいおばあちゃんと彼らのひいひいおじいちゃんが姉弟”・“お互いのひいおじいちゃん同士（=従兄弟同士）が日本で会い、そのひ孫同士がブラジルで再び出会えた”ということになります。私たちはお互いの存在さえも知らなかつたので、ご先祖様がご縁を繋いでくれたのだとしか思えてなりませんでした。

“<sup>いどこ</sup> ブラジルの<sup>いどこ</sup> primos”と過ごしたクリスマス



## ブラジルの親戚と過ごした幸せな時間

親戚のみんなと約二週間、おしゃべりしたり、料理したり、出掛けたりと「日常」を一緒に過ごしました。ポルトガル語に時々混ざる日本語、線香がお供えされたお仏壇、キリスト教のお祈りから始まるクリスマスパーティー、年明けと共に打ち上がる花火と大音量の音楽、元日の食卓に並ぶお雑煮と guaraná…。まさにブラジル文化と日本文化の融合でした。ご先祖様のお墓参りへ行った際は、「○○家先祖代々之墓」と彫られた多くの墓石を目にし、日本を離れて遠い国で力強く生きてきた人々の想いに触れたような気持ちになりました。

また、クリスマスと大晦日の間に私の誕生日があったのですが、親戚のみんながケーキを用意し、私を囲んで “Parabéns pra você nesta data querida…” とバースデーソングを歌ってくれました。一人一人と目を合わせながら、出会えたことがどんなに幸運なことなのかを改めて感じ、今までにないほど嬉し涙が溢れ、忘れられない誕生日になりました。初めて会った時から送り出してもらった時まで、どの瞬間も本当に大切な思い出です。

## 留学で学んだこと

今回の留学で学んだことは数えきれないほどありますが、特に大きな学びは「恐れず挑戦することの大切さ」と「それに伴う責任」です。同じ土地で家族とずっと一緒に暮らしてきた私にとって、ブラジルでの一人暮らし・大学生活は挑戦の連続でした。見ず知らずの人に拙いポルトガル語で尋ねたり、新しいコミュニティに飛び込んだりすることは、語学力以外の面でも成長するきっかけになりました。しかし同時に、何に挑戦する時も自分の行動に大きな責任が伴うことを実感しました。いつも無償の愛で助けてくれた家族は、地球の反対側にいます。自分の命は自分で守るしかありません。事前の情報収集や相手から信頼される行動の重要性を再認識しました。そして、挑戦の先には、大切な友達やブラジルの親戚との出会いなど、思いもよらない素敵なお贈りものが待っているということも身をもって分かりました。留学を通じ、逞しい精神を培えたと思います。

## おわりに

私の留学生活がもうすぐ終わりを迎えるとしています。留学が始まったばかりの頃は、ブラジル到着直後に怖い思いをしてしまい、日本恋しさに「ブラジルと日本が近ければいいのに…」と嘆いていたけれど、今は「またすぐに戻って来たい」という意味で同じことを思っています。そう思えるのは、常に支えてくれた家族、留学をサポートしてくださった先生方・教務学生室の方々、励ましの言葉をたくさんかけてくれた日本の友達、いつも応援してくださった方々のおかげです。本当にありがとうございました。この経験は一生の宝物です。そして、私は必ず、またブラジルの大地を踏みます。



© PICO AGUDO JAPIRA PR にて